

Title	<書評> Mitchell Aboulafia, Myra Bookman, & Catherine Kemp (Eds.), "Habermas and Pragmatism", Routledge, 2002
Author(s)	諏訪, 智史
Citation	年報人間科学. 25 P.225-P.230
Issue Date	2004
Text Version	publisher
URL	https://doi.org/10.18910/7637
DOI	10.18910/7637
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

Harbermas and Pragmatism

Mitchell Aboulafia, Myra Bookman, &
Catherine Kemp (Eds.), Routledge, 2002

史智訪誨

本書はドイツの哲学者ハーバーマスの思想と、アメリカで展開されているプラグマティズムの思想との関連を通じて、ハーバーマスの提起している理論を批判的に再検討している一〇の論文と序文、そしてハーバーマス自身がいくつかの質問に答える形式で書かれた後記から構成されている。まず以下に簡単に著者と論文のタイトルをあげておこう。

- ・ ミッシェル・アブーラフィア 序章
- ・ カール・オットー・アーベル 「道徳、法そして民主主義の関係性の考察：超越論的語用論の観点を通じたハーバーマスの法の哲学 (1992) ニッペン」
- ・ ジョセフ・マーゴリス 「超越論的理性の変移」
- ・ トム・ロックモア 「プラグマティズムの認識論的な約束」
- ・ マイラ・ブックマン 「能力形成：ハーバーマスにおける世界の再構築と文脈超越的な理性」
- ・ デイヴィッド・イングラム 「プラグマティズムの妖婦対手続き主義の神官：ハーバーマスとアメリカの法的現実主義」
- ・ フランク・I・ミッシェルマン 「憲法解釈の不一致の問題：法適用の対話は有効か」
- ・ レノア・ラングスドルフ 「四次元の再構築：ハーバーマスのコミュニケーション的行為概念のデューイ的批判」
- ・ リチャード・シュスターマン 「ハーバーマス、プラグマティズムそして美の問題」

・クリスティーナ・ラフオント「客観性はパースベクティブによるものか：ブランドムとハーバーマスにおけるプラグマティズムの客観性の概念の考察」

・サンドラ・B・ローゼンソール「ハーバーマス、デュイー、そして民主主義的自我」

・ユルゲン・ハーバーマス 後記

プラグマティズムは一般的には思考を行為との関連の中から捉える哲学思想であると考えられるが、それはアメリカの思想の潮流そのものであって、その特徴は様々であり、一言で表すことはできない。パースにはじまり、ジェームス、ミード、デュイー、クワイン、パトナム、そして最近ではローティなどとプラグマティズムを代表してきた論者は幅広く、限定された教義があるわけではない。各論者それぞれのプラグマティズムがあるとしても過言ではない。しかし各論者に共通していることは真理と実在に対する従来の形而上学への挑戦であり、それゆえプラグマティズムの認識論的な約束は、「認識論的な基礎付け主義 (foundationalism) の失敗の結果登場した、実践における知識の理解の中に横たわっている」(p47) である。一方でプラグマティズムのこのような思考の伝統が続く中で、他方ハーバーマスは自身のコミュニケーション理論の発展によって、それらのいくつかと分析哲学における語用論との影響を受けている。

このようにハーバーマスにとって、プラグマティズム受容は自身

の理論を洗練させる一つの契機であったが、では実際彼の理論とその他多くのプラグマティズム論者との理論の共通点および差異は一体どこにあるのだろうか。本書はこの問いを答えるための様々なトピックを提供しているように思われる。紙幅上も、そして本書の性格上とても幅広いテーマを扱っているので、ここで本書の論文における全ての議論を紹介することはできない。そこで以下では、伝統的なプラグマティズムにとって重要であると考えられる認識論、語用論、そして真理というトピックにしぼって、いくつかの論文でなされた議論を紹介するとともに、ハーバーマスとプラグマティズムの交差点に孕むいくつかの問題を考えてみたい。

まず初めに認識論的な観点からブックマンの議論を紹介する。ここでは、ハーバーマスの解釈学的なコンテクストに囚われない可能性の条件を探る志向に、発達心理学者のピアジェの強い影響が紹介される。ピアジェの構成主義的な認知構造の発達モデルによれば、子どもは言語の獲得に伴って知識が発達し、最終的に様々な規則や手続きを獲得するにいたる。こうした知識の発達段階を「操作的段階 (operating stage) (p71) と呼ぶが、様々な規則の中で問題解決するためには、「子ども自身のエゴイズムを脱中、中心化 (decentering) する」(p73) という前提から、他者の見地に立つ操作が不可欠となる。ピアジェのこのような理論は、近年のハーバーマスが普遍的語用論から新たに変わって模索する形式的語用論 (formal pragmatics) すなわち「概念、基準、規則、そして先見的図式を理性的に再構築する方法論的な態度」(p67) にとって、脱

中心化の過程は超越論的にアプリアリなものというよりむしろ、「不可避な(inevitable)」結果として現れることを明らかにしたのである。ピアジェをめぐるこうした議論は人間本来の認識構造のあり方を探る研究であり、心理学、認知科学そして進化論などの周辺領域との関連性も深いので、本書を通じて、そうした領域とプラグマティズムやハーバーマスの議論とを結びつける可能性を考えることもできるであろう。

次に語用論の観点からなされたアーペルの議論によれば、ハーバーマスのこうした超越論的な基礎付けを必要としない立場を批判し、自らの立場を「超越論的語用論(transcendental pragmatics)」(p20)として、理想的発話状況という議論の先行条件を、それへの批判は理想的発話状況それ自身が必要でないという「遂行的自己矛盾(performative self-contradiction)」を理由に究極的に基礎付けようとする。さらにハーバーマスと共に目指している、規範形成を討議による合意形成に求める討議倫理学の構想においても彼らは異なる立場をとる。アーペルはハーバーマスが目指す、あらゆる当事者に強制なく受け入れられる道徳的な「普遍化原則(universalization principle)」の必要性を認めながらも、例えば相容れない敵同士の合意形成という、現実の社会状況に照らしてありそうもない事態を想定し、社会的現実と媒介された新たな原則を設ける必要があるとする。それが、彼が「補完原則」と呼ぶものであり、責任倫理の観点から実定法(特に憲法)によって基礎付けられたものである。アーペルの安易な超越論的基礎付けに対する批判はともかくとして、

コミュニケーションによる討議倫理学の可能性を目指すという同様の目的に対する両者の立場の差異は、今後も考える必要があるだろう。

最後に真理の問題についてロックモアの議論では、ハーバーマスとアーペルさらにローティらは、初期のプラグマティズム、特にパースの目指した知識と真理に対する態度と大きく異なっていることが指摘されている。パースは可謬主義(fallibilism)、つまり知識の絶対性の否定から、我々は知識の実在性に対する信仰をもとに究極の真理に向かって探求しつづけることができるだけであることを強調している。しかしハーバーマスやアーペルはパースに一定の理解を示しているにもかかわらず、合意が(倫理的)真理を表すと主張することで、真理と知識の混同を招いている。確かに我々は意識から独立した実在を把握できないかもしれない。しかしパースによれば、我々は間主観的な議論を基礎にした知識があるのみで、それは常に誤謬の可能性にさらされており、真理という極限概念に到達することはない。真理と合意はあくまで独立した概念であって、合意から真理を導き出せるわけではないのである。

一方ローティは反形而上学あるいは反基礎付け主義というプラグマティズムの伝統を貫き、独自の相対主義を展開している。しかし彼は独特の懐疑主義によって、「基礎付け主義と真理をあきらめると同時に、彼はプラグマティズムの中心をなしている知識への関心もまたあきらめている」(p59)。つまりローティの場合、パースやデューイのもっていた探求による知識の獲得という積極的構想が見られなくなったのである。このようにロックモアの議論では、ハー

バーマス、アーベル、そしてローティに見られる真理の認識に関するパスとの差異が主に論じられたわけであるが、だからといってパスの理論をそのまま賛美するのは安直であろう。確かにハーバースの真理概念の理解はパスとは大きく異なっているが、しかしコミュニケーション理論や基礎付け主義のもつ思想的戦略の意義を考慮し、その重要性を考慮したうえで、パスのプラグマティズムの有効性との比較を慎重に行うべきであるように思われる。さらにハーバースにおいて真理と合意による納得の次元が混同されていると考えることには疑問に感じる。ハーバースが論じるようなメタ言語的な真理と、パスのいう極限的な真理とは区別できるとも考えられるが、ここでこれ以上詳しく論じることはできない。いずれにしても知識と真理は常にプラグマティズムの主要なテーマであり続けているので、本書の議論はそれについての一つの考え方を提起している点で評価できるだろう。

以上認識論、語用論、そして真理というトピックについて紹介してきたが、これらの背景には、ハーバースのコミュニケーション理論の構想にとって最も影響力の大きかった理論の一つである、ミードの社会的相互作用があることは注目に値する。実際彼は後記で、ミードの「精神・自我・社会」を自分の授業のテキストに用いていたことを語っている (p.226)。カントの超越論的哲学以降、現象学を含め、一人の自我を中心とした哲学から、コミュニケーション論的に転回するにあたって、ミードの相互作用論が有用なのは論をまたない。ここでハーバースが注目したのは、前言語的な水準から

言語的な水準に移行する社会的な相互作用において、意味が様々なパスペクティヴを超えて普遍化していく過程である。ここに認識論的にはピアジェの脱中心化の概念との類似点が見られるが、ハーバースの構想する普遍的語用論にとって、その普遍性の条件を考える上で、パスペクティヴによる相対化を免れることは至上の命題である。ところでミードもパスと同様に可謬主義を採用しており、世界から予測不可能な新奇なものが創発するために、科学的知識はすべて単なる仮説に留まるにすぎないのであり、このようなミードの可謬主義とハーバースの真理観は異なっている。これはハーバースが主にミードの言語論にのみ着目した結果であると考えられる。ハーバースのミード理解では言語の重要性が注目されているが、ミードの構想では、それ以上に他者の役割取得による自我の拡張によって、共同体を組織化することが見込まれているのであり、それがハーバースでは言語による討議に還元されてしまっているように感じる。ハーバースのミード理解の問題点は本書では考察されてはいないが、今回紹介したトピックとミードの関連性、さらにミードに端を発したシンボリック相互作用論などの学説との関連性などを考察することは重要であろう。このようにミードの影響は、ハーバースとプラグマティズムの関連性を探る上で非常に重要であると考えられる。

以上のようなハーバースとプラグマティズムの関係性はもちろん、ハーバースの思想の持つ多くのトピックの中の限定された側面であることは言うまでもない。特に近年、ハーバースの政治思

想的動向に注目が集まる中で、彼がプラグマティズムに限らず、デリダに見られる脱構築論者や、デイビッドソンやブランドムといった分析哲学の潮流などの議論を吸収し、論争を交わす真摯な態度を見ると、自らの理論をリニューアルしつづける彼の学問に対する意欲に改めて驚かされる。こうした進化し続けるハーバーマスの思想からすれば、本書で展開されているハーバーマス批判はどれも少なからず一面的なのかもしれない。しかしハーバーマスのコミュニケーション理論や討議倫理学を、近年の思想との関連から今一度再検討するとともに、ミードのような従来のプラグマティズムの新たな可能性の射程を考える上で、本書の議論は大きな成功を収めていると評価できるだろう。

